(C)下野新聞社

「伝承者」が迫真の語り

ヒロシマをつなぐ 中

本紙記者被爆地報告

50人分の座席が用意された会場は、全国から訪れた老若男女で埋まった。その前で、一人の女性が「その時」のことを語り始めた。

「ピカッ、ドーン。『目がくらんで何も見えない。どうしよう』。ちいちゃんはそれっきり何も分からなくなりました」

語り手は被爆者ではない。8月3日午後、広島平和記念資料館のシアター。元会社員東野真里子さん(63)＝広島市安佐南区＝の講話を聴いた。

東野さんが情感を込めて語るのは、17歳で被爆した「ちいちゃん」こと母親の竹岡智佐子さん(88)＝同所＝の生々しい体験だ。母が戦後、平和と核廃絶の願いを国連で訴えたことも話す。まるで東野さん自身の体験のように、言葉の一つ一つが胸に迫った。

被爆者の高齢化が進む広島は今、被爆の記憶の継承に危機感を募らせている。市は、被爆者に代わって体験を語り継ぐ「被爆体験伝承者」の養成事業を2012年度に始めた。伝承者の中には10代の学生もいる。

同資料館では、研修を終えた74人が交代で1日3回の定時講話を行う。うち1回は英語で語られ、多数の外国人が耳を傾けている。

東野さんは親の体験を語る唯一の伝承者。「母の平和への思いや被爆者としての苦しみ、さらに『強さ』を伝えられるのは娘としてうれしいことです」

記憶の継承

体験者減り育成進める

こうした体験伝承者育成事業は東京都国立市も15年から始めているが、本県で取り組む市町はない。宇都宮空襲など各地で戦災に見舞われた本県でも、戦争体験の継承は大きな課題だ。

市民団体の「ピースうつのみや」は、ジオラマなどで実態を伝える「宇都宮空襲展」や、空襲犠牲者を追悼する灯籠流しなどの活動を通し、空襲や戦争の記憶を伝え続けている。空襲体験者に代わり、体験を伝承できる会員もいる。

今夏の空襲展は「戦争と若者」をテーマに選び、「いかに若い世代に伝えるか」を念頭に置いた。若者たちの意識の薄さに危機感を覚えるからだ。佐藤信明事務局長(71)は「若者が今の自分と戦争を結び付け、自分や国の将来を真剣に考えるきっかけになる活動を目指したい」と話す。

広島で3日に行われた講話の最後のことだった。

「実は今日、ここにちいちゃんが来ています」

東野さんは、会場の一番後ろで見守っていた竹岡さんを紹介した。驚いて振り返る人々に向かって、竹岡さんは声を振り絞った。

「私と違って皆さんは若い。この記憶をほかの人にぜひ伝えてください」

母親の被爆体験を「伝承」する東野さん。スクリーンには被爆前の母の姿が映る＝3日午後、広島平和記念資料館